日本医史学雑誌　第60巻第4号（2014）　417–419

加治時次郎について

多賀須幸男

横浜市

明治44年に実費診療所を開設した加治時次郎（加藤時次郎の名前で記される場合がある）は日本の医療社会化の原点であり，医療史では避けて通れない．しかしその思想や行動は主に左翼的なジャーナルに掲載されたため，実像はよく知られていない．大牟田太朗著『加治時次郎の生涯とその時代』が出版された[1]．著者の大牟田太朗氏は早稲田大学の卒業で，筆者が属する近代人物研究会の会誌「人物研究」の編集長である．資料を丹念に読み込まれ，関連する周辺の歴史も概観された研究書で，人名の索引のみでも14ページに及ぶ．その内容を以下に要約する．

加治時次郎は安政5年（1858）元簡（げんかん）の次男として豊前国香春（ぶぜんのくにかわら）の吉松家に生まれた．加治姓でないのは父元簡が医家吉松家の養子だったからである．吉松家は天正年間に秀吉により香春が落城したときから医家となる．時次郎が生まれた頃には元簡は長崎で医学（蘭学）の修業中で，母を亡くした時次郎は祖父に預けられ，7歳になって漸く父親の許に戻された．

元簡は加治医院を継ぎ京都郡（みやこぐん）崎山村で開業した．元簡が生まれた在所の田川郡は近代になって炭坑地帯となるが，往昔，豊前国は新羅との交流の門戸であり，古くから歴史がある文化的土地柄あることを著者は特に強調している．加治家は現在もその後裔が医業を継承している．

身分の違いから豊津の元藩校育徳館への入学を拒絶された時次郎は，父の薦めで長崎の崎陽医学校でドイツ語を学んだ．明治3年に政府がドイツ医学採用を決めると，東京で開業していた叔父吉松文治を頼って17歳時に上京する．明治9年大警視川路の時の警視裁判医学校に入学できたが翌年には閉校になり，東京大学医科大学の予科に編入された．しかしお雇い講師ランゲの排斥運動に加わり退校になる．やむなく時次郎は吉松医院の薬局を手伝いながら長谷川泰の済世学舎で学び直し，明治15年現地医術開業免許を取得した．一時は芝居作者になろうと思ったこともあったが，浅草で繁盛していた久留米出身の小林病院の助手になり，医局の書記に抜擢された．翌年には正式の開業免許も得て薬問屋の加藤万兵衛と養子縁組をし，加藤と改姓した．当時はこのような養子縁組は珍しいことではなかった．

勉強もできる警視庁の梅毒病院の副当直医を兼ね，貧困，劣悪な環境と病気の関係に目覚めて佐野常民の大日本通俗衛生会に加わって啓蒙活動に参加した．明治16年に千住に加藤医院を開院する．コレラが流行して京橋区の区嘱託医の重責を負った．悪徳医師や売薬業者，祈禱師などを矯正した．そうこうする間に加藤せんとの間に長男時也が生まれた．

時次郎が目黒に買ってあった土地が高騰して1000円の利益がでたので，多少の借財を加え官費留学生の1/4に滞在費を切り詰めれば宿望のドイツ留学ができることが分かり，1888年（明治21年）にフランスの客船サジール・マンチン社の3等船客となりマルセイュに上陸，ドイツに向かった．入れ違いに森鷗外は帰国の途についている．

時次郎は経費が安く日本人が少ないエルランゲン大学を選んだ．その前にビュルツブルグ大学で外科，整形外科，包帯学を聴講．エルランゲンに移ったが，その寒さは体にこたえた．ブレスラウ大学に移り淋菌を発見したナイサー教授について皮膚科学を研修したことが自慢だった．1889年にドクトル・メディツィーナの学位を取ることが出来た．吉松医院や小林病院での実地経験があったからであろう．

時次郎は次いでウイーン，ベルリンに移り，多くの知己を得た．小国に分かれていたドイツは宰相ビスマルクにより統一されつつあった激動の時代で，ヤマト会という日本人会があって留学生から西園寺公望まで様々な階層の人物と知り合った．当時の日本人留学生の様子を森鷗外はドイツ日記に残している．

帰国する1890年に国際医学会がベルリンで開催され，時次郎も後藤新平らとともに参加してビスマルクの健康保険法についても聴いた筈である．大量の書籍や器具を買い込んでいた3等船室の時次郎は，2等船室の星亨と懇意になった．帰国すると養子先の京橋区水谷町に外科皮膚科の加藤病院を開設し，洋行帰りのドクトルとして成功して，高輪南町にも分院を設けた．自らの喀血があり肺結核として暫時休養が必要とされたが，X線が無い時代で病状どの程度であったか分からない．その所為ではなかろうが，時次郎はせんと離婚している．

最新のドイツ医学を学んできただけで無く，上流社会の退嬰現象と下層の悲惨な生活を身もって見てきたので，社会改良への決意をあらたにした．後藤新平が内務省の衛生局長に就任して，実現には遠かったが医療保険，救貧プラン，下層民の生活環境の問題などさまざまな医療福祉政策を打ち出していた。加藤病院はより繁華な場所に7000円を投じて移転して大きな看板を掲げ，帝国ホテルに長与専斎らの医学界の要人を招いて先行投資としての開院式を行った．

医療や社会の問題を根本から打開するためには政治家になるに越したことはないと考え，明治34年に星亨の推薦を得て東京市市会議員選挙に出馬するも落選した．その後に堺利彦，幸徳秋水，安倍磯雄，片山潜らと相知り，目薬「精錡水」を売り出して評判になった岸田吟香とも交流があった．時次郎は黒岩涙香主宰の「理想団」に参加した．長い間独り身であった時次郎は淋病薬「ツヨール」の創薬者の榊原兵吉の妹の，19歳も離れたさきと再婚した．水銀治療薬の時代である．

日露開戦の3ヶ月前に時次郎は750円を拠出して平民新聞の創刊（編集名義人堺利彦，印刷名義人幸徳秋水）を支援したが，非戦論を主張したので為政者からたびたび発行停止を命じられた．目の前の苦しむ民衆を救済したいと思う臨床医らしい発想であった．この時代には多数の新聞・雑誌が創刊され，片山潜が第2インターの副議長に選出されるなど，社会主義が勃興した．本書には当時の戯れ歌（ざれうた）が多数引用されていて，世相がよく分かる．時次郎は毎朝4時前に起床，水浴後に読書や翻訳，7時には病院に出掛けて300名以上の患者を診たというから，超多忙であった．

日露戦争勝利後の国内の社会不安のなかで政権が画策して，明治43年11月に大逆事件の被疑者検束が始まった．翌年に秋水や紀州の若い医師大石誠之助を含む12名が冤罪で絞死刑に処せられ，徳冨蘆花や石川啄木などが非難する論文を発表して大きな社会問題となった．時次郎夫妻は日本人のアメリカ移民の現状や医学の進歩の調査をするため日本を離れていたから，連座を免れた．

民衆の不満を和らげるために明治44年に「施薬救済の勅語」が発せら御内幣金（ごないどきん）150万円を元に，勅任官10パーセントの給料カットや富有者の寄付などにより合計2400万円を積み上げ，桂内閣は恩賜財団済生会を発足させた．カネは内務省が管理し極貧患者に施療券を発行したが，年ごとの被施療患者の激増により徐々に破綻に追いこまれた．時次郎は救済には賛成であったが，海外の実情をすでに詳しく調査していたから，都市部に形成されつつある中等階級のうちである程度の知識を持ちながら苦しい生活を送っている人たちの救済が重要で，慈善という思想（例；三井慈善病院）では成功しないと言う重要な提言をしている．

月収30～40円以下の小額収入者を夜間にかぎり診察し，薬価および手術料は実費とするところから始めるべきであると主張して，加藤病院に実費（軽費）診療所を併設した．慶大卒業後に時事新報社に入社して社会問題に関心が強く，三井銀行を経て王子製紙会社に入り成功していた鈴木四郎を理事長にすえ，時次郎は理事及び医療部長として診療を始めた．医師以外の者を理事長としたのは異例の人事であった．薬価は内服薬1日8銭以上，頓服5銭以上などと一般の1/3乃至1/4の

廉価に決めた．診療科は内科・外科・皮膚泌尿器科・産婦人科で，診療時間は午後7時から10時とした．初日の来院者は25名ほどであったが忽ち増加して，診療時間を午前9時から午後8時までと変更し，初年度の1日平均受診者は586名に及んだ．薄利多売でありながら大正4年度には7656円もの余剰金がでた．

受診者はその後も急増して，横浜・浅草分院を増設し，大正4年には医員39名，薬剤師23名，看護婦43名など従業員合計168名，レントゲン機器もそなえ診療科も13科の，当時としては10指に入る大総合病院となった．その頃は開業医の黄金時代と言われ，「医は仁術」を隠れ蓑に営利性拡張のみに明け暮れしていて怨嗟の的になっており，実費診療所の設立希望は全国から寄せられたが，内務省は容易には許可しなかった．医師会の実費診療所撲滅運動はあの手この手を用いて熾烈を極めた．

時次郎は社会政策実行団の事業として平民食堂を開き10銭前後で1日700食以上売り上げて米価高騰に対抗し，平民パン，平民薬局などと事業を拡張した．このようなことを通じてデモクラシーが拡がり，おおきなうねりになった時代である．

60歳になった時次郎は実費診療所を辞任し，加藤病院を平民病院と改称してその運営に専念した．下層社会の実情をくわしく観察し，堺利彦のうしろたてとなって売文社の運営上の顧問となり，「生活の力」毎月5万部を発行した．弁護士山崎今朝也を顧問にして法律相談所を開設し，前々から後援していた曾我廼家五郎一座を毎月開催する演芸会（みのる会）に招くなどは，ユニークな活動と言えよう．

本書は9章に分かれていて，7章「生活共同体への夢」までを時次郎の活動を描写した横糸の部分とすれば，第8章「社会政策実行団の活動」，第9章「第二維新の提唱」は縦糸に相当する部分である．第二維新とは明治維新以降の社会改革を提言する内容だが，関東大震災後の大混乱からどう立ち直るべきかを同時に示唆していると言えよう．

大正11年に夫婦で日蓮宗に帰依して医療の傍ら宗教活動に没頭したが，大正12年の関東大震災で平民病院は壊滅的な被害を受けた．そこから漸く立ち直った昭和5年（1930）に脳出血のために死去した．享年73歳。

注

1）大牟田太朗．加治時次郎の生涯とその時代．長野県：鳥影社；2014